シンポジウム記録 日本水産学会のこれから—課題と展望

3-(2) 今後の学会のあり方—1：
執行体制や委員会活動の視点から
—委員会運営における課題と展望

矢澤良輔

東京海洋大学海洋生物資源学部門

3-(2) What JSFS should be in the future?—1: From the
view point of an executive board and committees
— Issues and prospects in committee management

RYOSUKE YAZAWA

*Department of Marine Biosciences, Tokyo University of
Marine Science and Technology, Minato-ku, Tokyo 108-
8477, Japan*

本稿は、理事会主催シンポジウム“日本水産学会のこれから—課題と展望”において、筆者が発表した日本水産学会の各委員会における幹事の現状についての発表をまとめたものである。現在、日本水産学会の総務、庶務、会計、編集、企画広報、出版、シンポジウム、漁業懇話会委員会担当、水産利用懇話会委員会担当、水産増殖懇話会委員会担当、国際交流、水産教育推進、水産技術誌監修、男女共同参画推進の各委員会において幹事が存在する。筆者はこのうち、企画広報委員会幹事（平成25年度～平成26年度、任期2年）、出版委員会幹事（平成26年度～平成29年度、任期2年×2期）、編集委員会幹事（平成26年度～平成29年度、通常任期6年）を務めた。筆者が務めた3つの幹事職では、水産学会誌（和文誌）、Fisheries Science、水産学シリーズといった日本水産学会による出版物や刊行物を取りまとめる委員会であったため、総務、庶務、会計や国際交流といった他の委員会幹事の仕事の内容とは異なる点も多いが、以下に幹事の仕事内容・現在の幹事の選出体制、筆者自身の感想について紹介する。

私が務めた各委員会幹事の主な仕事は、委員会会議の準備（会場設営、資料の準備）、議事録の作成、執筆者や著者、あるいは出版社とのやりとり等である。編集幹事については、水産学会誌の校正チェック、Fisheries Scienceの受付前校正等の実務作業が含まれる。教員として海洋大学に着任して間も無く幹事を務めることになったため、研究活動が主であったポストドクでは無かった仕事を覚えることができたことは大学での仕事にも役

立ったと感じる。前述の通り、筆者が幹事を務めてきた各委員会では、水産学会の学術的、社会的な活動に関わる議題が主であったため、日本の水産学を支える先生方のお話（サイエンスに関する話題のみならずご自身のライフスタイルや哲学なども含めて）をうかがえたことや、普段お会いする機会の少ない他分野の先生方のお話をうかがえたことは、筆者にとって貴重な経験となった。幅広い水産学分野の最先端のトピックスに触れる機会を得ることのみならず、水産学シリーズのような出版物や、学術雑誌がどのように作られて行くかを、体験できたことは今後、自分自身が研究成果をアウトプットしていく中で大きな財産になったと感じる。また、校正係は仕事の性質上、様々な分野の論文に目を通すことになることから、FS誌だけでなく、論文投稿の際に気をつけること、読みやすい、あるいは、採択されやすい論文の書き方なども学ぶことができた。私自身にとっては、委員や理事の先生方の水産学会の活動を通じて、日本・世界の水産をより良くしていこうという情熱を間近で感じることが出来たことが、最も大きな幹事を務めた報酬であった。

現状、在京の水産学会員に占める海洋大の教員の割合が高いこと、水産学会の事務局が海洋大にあるということ等から、様々な委員会幹事を海洋大教員が務めている。全国的に新規の若手教員採用が少ないこともあり、水産学会に所属する海洋大の若手教員は複数の幹事職を同時に務めることも珍しくない。編集幹事のゲラ校正についてはEメールでの事務局とのやりとりが可能になったこともあり、海洋大以外からも幹事をご担当いただくようになってきているが、その他の幹事についても、様々な組織から広く募集することが必要であると感じる。各幹事の仕事のノウハウがそれぞれ確立されているため、どの幹事の仕事を引き継ぎ後、すぐに対応可能となっているので困ることもほとんどない。幹事の仕事をすうえでのデメリットとしては、どの幹事の仕事についてもある程度の時間を取られることや、秋季大会で委員会が開催されることが多いので、（自身の発表がなくても）出張する必要があることなどが挙げられる。

以上のような状況を踏まえ、水産学会の各委員会活動を底支える幹事の仕事を通じて、今後も水産学会の発展に寄与したいと考えている。